

XI. 大陸浪人の地理哲学（3）

XI-1 元武士のゆくえ

存在は、どこに場を移しても同じように機能する「情報＝ウイルス」ではない。カントが言ったように、場をともなつてこそ存在である。そばに他人の耳を期待できない孤独な文士たちが紙という場所を求めたように（言文一致運動）、居場所を失った武士たちは自分達の居場所を求めて旅をせねばならない。

■ 三つの武士論

- ① 武士＝流民論（折口信夫）……………土地を追われた戦争の敗者たち。
- ② 武士＝農民論（原勝郎・柳田国男・石母田正）……武士は農民（在地領主）。都会の貴族に対する周縁的存在。
- ③ 武士＝官僚論（久米邦武・高橋昌明）……………武士は貴族。中央にあつて武芸に練達した「家」から生じた。
→ 近代史家からみれば、いずれもが正しいと考える。なぜなら、逆説的に、近代の元武士たちの行動が、まさにそれぞれの武士論をたどるように進むからである。

■ 失われる武士のアイデンティティ

戸川残花（文士・元彰義隊員）「明智光秀」1893年

支那伝統の道德論、封建政治の忠義論、これらが皆な真理の標準ならんには光秀は逆賊なり乱臣なり不忠なり凶漢なり。封建政治の下に行なはれたる忠義は理もなく非もなく一旦の約束により其君主の所業の邪正を問はず、其身其一族其一門を挙げて釜中の魚となし籠下の烟と為す可き教なればなり。封建政治の世には人に権なく天に父なき時なればなり。光秀をして明治の世に生れしめなば、渠が本能寺の一挙は正当防御と云ふも敢て過言に非ざる可し。

- 残花の光秀への同情は厚い。忠君愛国と並ぶ武士の柱である下剋上を実践に移した光秀は、当然、封建の道德には反したが、明治のいまなら革命といえただろう。
Cf. 明智光秀の辞世
心しらぬ人はなにともしはゞいへ身をもをしまじ名をもをしまじ
順逆無二門、大道徹心源、五十五年夢、覚来帰一元
- 自分の心を知らぬ他人はなんとでもいうがいい。身も名も惜しくない、と光秀はいい、道に順逆はなく、心に徹したまで、五十五年の夢は覚めて元の場所に帰るだけだ、ともいう。
- 残花は慶喜に封建的な忠義を尽くして逆臣となつて武士の位を失い、いまは自称文士として、若い藤村や花袋の世話をしている。順逆は光秀と正反対である。だが心は同じだと、残花はいいたい。
- 歴史の順逆を知る者はどこにもいない。

XI-2 流民としての武士

■ アジア主義の誕生（武士＝流民論）

- ◎ 「野に伏し山に伏す位は常住の事……」（頭山満、福岡藩）
- ◎ 土地もなく、売るものとおのれの身体以外にはもたぬ元武士がなお、《武士道》にその根拠を見いだしたとしても、それはけっしておかしなことではない。

→ ただし、それは折口信夫のいう傾き者たちの「ごろつき道徳」。〈暴力によって語る〉道徳。「腕力の権」（宮崎滔天、熊本藩）。

民権の伸張大に可し、然れども徒に、民権を説いて、国権の消長を顧みる無くば、以て国辱を如何せん、宜しく日東帝国の元気を維持せんと欲せば、軍国主義に依らざる可らずとし、国権大に張らざる可らずとし、遂に曩の民権論を捨つる弊履の如くなりしなり。

『玄洋社社史』

◎ 日本に居場所を失った彼らは《アジア》に目を向ける。

◎ 民権主義者にして国権主義者であり、いわば国民国家主義者。アジア中に国民国家を作るべく、彼らは戦う。日本はその尖兵、という位置付け。

Cf. 日韓併合における大陸浪人の敗北（黒龍会の内田良平（福岡藩）・一進会の李容九とが対等の日韓合邦を試みるも、失敗に終わる。国内では大逆事件で、国外においては日韓併合で、元武士たちは敗北する）。

XI-3 農民としての武士

■ 農本主義——土地への回帰（武士＝農民論）

民衆から土地を収奪したことが、資本制的な生産様式の土台を構築した。……

E・G・ウェイクフィールドの偉大な功績は、植民地について何か新しいことを発見したことにあるのではなく、植民地において、母国の資本制的な関係についての真理を発見したことにある。……まずウェイクフィールドが植民地において発見したのは、ある人が貨幣、生活手段、機械類、その他の生産手段を所有していたにしても、すぐに資本家になるわけではなく、そのためには賃金労働者が、すなわち、他人のために自由意志で自分を売らねばならない他人が存在しなければならないということである。彼は資本とはたんなる物ではなく、物によって媒介された人格のあいだの社会的な関係であることを発見した。

マルクス『資本論第一巻』

→ 大陸浪人はウェイクフィールドと同じ位置にいとみていい。

→ 末永^{みさお}節（玄洋社、福岡藩士）の大高麗国（鳳の国）建設計画、出口王仁三郎の蒙古王国論。以後、満州事変、大東亜共栄圏へとつながる、帝国主義を逃れて新国家を作るべく外に向かう運動。

→ しかし、資本制社会の中心を逃れて周縁に向かう武士と細民の欲望は、一方で、世界資本主義の欲望。周縁の低開発地帯の存在は、剰余価値率の上昇を保証する、より強力に搾取可能な低賃金労働者をうみだす。

→ 低賃金労働者を供給する農村・外地人を犠牲に日本は資本制社会を達成。

→ 大陸浪人による、流民を引き連れての懸命の逃走にもかかわらず、意志に反して、労働者を資本家に売り渡す仲買人のように機能する。

■ 権藤成卿（久留米藩）

黒龍会のブレーンとして韓日合邦にかかわり、大高麗国建設の理論家であり、昭和のはじめには「思想界の王座」を占めるといわれ、昭和維新の「黒幕」とされ、丸山真男によりファシストとされた人物。

土地を離れて人類はない人類を離れては神もなければ、社稷もない、乃ち人類は、必ず其土地に就て衣食住を営むべきものである……

農の字を細かに味へば、国民衣食住製造の意、国民大多数の意、又た古代に於ける国民の総称である。

『皇民自治本義』1922年

- 問題は土地。維新以来の土地私有制を否定。彼のいう土地は、もっと根源的に人間の生にむすびついた、文明以前・狭義の農耕以前の《大地》を意味する。彼の用語では《社稷》
- ◎ 社稷とは？……国体を意味する。なぜなら「国体とは本来何のことで有る、人の必要は衣食住と男女の性欲ではないか、衣食住と男女の性欲を離れて人はない、人を離れて郷団はない、郷団を離れて国家はない」。また憲法も意味する。「憲法、即ち『コンスチテューション』といふ語は、本質といふ意味である。国の本質は、社稷の外にはないでないか」。
- 資本制生産様式の土台が土地の収奪にあること、日本資本主義が農村と周縁とを犠牲に成立していることを的確に見抜き、明晰に問題化。『皇民自治本義』は日本最初の革命書。
- ナショナリズムからウルトラナショナリズム（超国家主義）へ、という想定（丸山・橋川文三）と異なり、インターナショナリストから農本主義者として回帰＝昭和維新。

昔山伏はほら貝を吹きたてて山野を遍歴し、この音で猛獣毒蛇を追払った後で山林原野を開墾して、こゝに種蒔して自らの生計を営んだ、領主から税を要求して来れば「我々は全然人の援助を受けずに自らこの土地を開いた、若し恩を蒙ったものがあるとすればそれは天神地祇に対してのみである」と云つてこの要求を拒んだ……

- 山伏から農民にいたる、武士の生成変化。

XI-4 官僚としての武士

■ 大川周明（庄内藩）——大地を離れて（武士＝官僚論）

昭和維新が、民本的主体の支持を得ることはなく、戦前日本における最後の革命はあっけなく幕を閉じた。「うす気味悪い」「精神異常者」は、あるいは暴力は、内地から一掃された。もしファシズムがはじまるとすれば、ここからである。

今日の日本の政治家には不満な点が多々ありますが、最も我々の嫌(あきた)らないのは、実に政治家の心術であります。明治維新以前は、御存じの如くに、武士が政治家であり且軍人でありましたが、武士の最も貴んだものは士道であったのであります。この士道は所謂文武両道でありまして、文即ち学問としては経史の研究をやらなければならぬものになって居た。……然るに明治維新以後、武士の職務が二つに分化して、軍人は軍人、政治家は政治家と云ふことになったのであります。……然るに政治家に対しては、国家も国民も、殆ど何等の精神的要求をしなかつたのであります。……然るに軍人の方は、軍人精神を貴ばなければならぬ、体面を重んじなければならぬと云ふことを、軍人自身が常に思ひ、世間も亦之を要求して来た為に、政治家の如く墮落しなかつた。……

大川周明『日本及び日本人の道』1925年

- 軍人＝官僚論。官僚的な武士道である「士道」が説かれる。権藤にあった官僚批判はない。

先づ第一に価値の下なるもの、即ち地に対する道から稽へて行きます。……これに対して我々の道徳的原則は『克服』であります。地と云ふのは精神に対する自然であります。この自然に対する我々の道徳的態度は、これを克服することにあります。自然に支配されずに自然を支配し、さうして我々の人格の確立に役立たせることが、第一の道徳的原則であります。

- 天地人のうち、「地」は下なるものであり、大川にとって克服すべきもの。大地＝社稷一点張りの権藤とは大きく異なる。

【満洲移民】

……満蒙は未だ従来の版図主たる中華民国政府より、其独立を允許(いんきよ)せるものでもなく、列国の公認せるものでもなく、我国の藩属でもなく附庸でもない。……

移殖民の恒例は、第一、祖国との関係親善にして、交通往復便宜なるを要し、第二、風土気象衣食住居の差違あるも、子孫の蕃殖に支障なきを要し、第三、敵国の津関遮断乃至優勢民族の圧迫なく、祖国援護の及ぶべきを要するものとしてある。若し以上の三綱に随はざれば、移殖民の成功は覚束ないのみならず、三四代にして子孫滅絶するのは、其考左甚だ明瞭である。……

人類の始原は一である。世界一民の説は、自治公典の根本起源である。故に人の性情に黄白の差別はない。然るに道德基礎に異同を画(は)かり、特殊特別を誇張し、世界に通用せぬ理屈を列(なら)べ強て祖国愛の囚はれを打ち堅め、和好善隣の天則を紊(み)だすのは、我余剩民をして第二の自治国を創開さす大障害である。……今ま何を苦しみ呼応困難なる廖遠(れうゑん)の地に、棄民の計画を立つるのであるか。

権藤『農民自給論』1932年

- 権藤は端的に満州事変にも満洲移民にも反対。移民先の先住民との軋轢を生むような日本のナショナリズムの輸出にも反対(大陸浪人として韓日合邦運動にかかわった彼はその困難をよく承知)。国内の農村改革が先。
- 大地の起伏を無視し、多と一とを弁証法と称して捏ね回す「アジアは一つ」なる観念が、いかに空疎かを、権藤は語っている。

……満洲を最も有効に、日本の生命線たらしむる為めには、日本と満洲との間に横はる、経済的境界を除いて、満洲を一単位として採る大きい経済機構の中にとり入れた日本を造らねば不可能である。日本側は、満洲に対し、合理的投資を行はねば、却て日本に対して害をなすに至るであらう。

農業問題にしても、一番利益の挙がる米だとか、小麦にしても満洲で作れば、内地の三分の一で出来る。満鉄農務課の算定によると黒龍江省、奉天省、吉林省等では、米一升八錢で出来る。肥料は要らず土地は安いし、一升八錢の米を減茶苦茶に作られては、日本農村問題の解決とならず、日本農民の圧迫となるだけであるが故に、国家的統制のもとに、農業移民をやらねば、日本のためにならない。斯くの如く行き詰った日本は、一日も早く行き詰った資本主義経済制度による所の、政党政治を根本から改革し本当の、日本に建て替へなくてはならない。

大川『日本精神への浄化』

- 大川にとって、低開発地帯としての満洲とは、資本主義がつくりだす内地の「日本農民」をふくめた低賃金労働者の楽園。しかも現地のより低廉な賃労働者をさらなる外地に追いやる。しかも通常は放置してもそれをおこなう資本主義にかわって国家が、いちやくそれを遂行する。
- 大川にとって革命とは、権藤や橘が夢見たような、資本主義以前に時計の針を巻き戻すことではない。反対に、針を先に進めることであり、それは国家が資本主義を追い越すことを意味する。「新日本」、「新亜細亜」、「新民」……。

日本は『大乘相応の地』である。故に其の政治的理想は遠々として高からざるを得ぬ、国を挙げて道に殉ずるの覚悟を抱いて、而して大義を四海に布かんこと、是れ実に明治維新の真精神を体現せる先輩の本願であつた。新日本の国民は、此の本願を伝統して、森厳雄渾なる職責を負はねばならぬ。而して亜細亜の指導、その統一は、実到大義を四海に布く唯一路である。そは日本の為であり、亜細亜の為であり、而して全人の為である。総ての亜細亜をして、来りて日本を強め、而して復興亜細亜の実現の為に協力せしめよ。

大川『復興亜細亜の諸問題』、1922年

- 大川において、アジアは非ヨーロッパという意味であらかじめひとつであり、彼の精神は水平かつ均質に広がって、インドを越え、ペルシアを越え、トルコに達する。そもそも《大地》は、克服されねばならないなものかであり、彼の精神は、すでにこれを克服して平坦に地ならしされ、アジアを網羅している。

XI-5 天上の武士

■ 鹿子木員信（熊本藩）

大日本言論報告会事務局長、国民精神総動員委員会委員。武士道を「最も貴く美はしきもの」と絶賛、「武士的精神なき日本人を考ふる事は出来ぬ」という。軍人でもあり哲学者でもある彼はまた、多くの大陸浪人やアジア主義者がそうだったように、冒険家でもある。一九一八年、日本人ではじめてヒマラヤに入ってカンチェンジェンガを目指した。道中は恐ろしい天候不良だった。アジアを東西南北に分断するヒマラヤ行きは、彼になにも見せなかった（「濃霧に蔽はれて、何も見えぬ」）。しかし、そのことはヒマラヤの美を永遠にする。「プラトンの心は、即ちヒマラヤの姿である。我が心、プラトンに憧憬（あこが）れる時、我が眼は、ヒマラヤの不思議なる美——世界の美に向ふ」。

- 大川が精神のうちでアジアを均していたころ、鹿子木は精神のうちにアジアを見下ろす高峰にいた。
- 最初期の「全体主義」なる語の使用（1917年）。ムツソリーニの政敵が1923年に批判の語として最初に使用した Totalitarismo（全体主義）より早い。

戦争は人間一切の自然的要求、自然的情欲を超越克服して、或るより高きものに仕ふるの心、即ち道義的精神をその根底とするものである。かくて戦争を為る事は、戦争を為(す)る人に取つては、既にそれ自身道徳でなければならぬ——我等は心に銘して深く大いなる此の事実を忘れてはならぬ——かくて戦争を以て直ちに非文明の事、野蛮行為と為す人は、自らその言ふ所を知らざる人か、然らずんば、人間的幸福を以て無上のものとして、物質的文明に随喜の涙を流す唯物主義者、幸福主義者、豚、支那人の弟子でなければならぬ。

鹿子木『永遠之戦』1937年

■ 石原莞爾（庄内藩）

たとへ上からであらうが、信念を以て国民を引っ張って行つたならば、国民はきつと附いて来ます。総理大臣自ら大政翼賛会の陣頭に立つて国民の意見を総合し、国家の進路の発見に精進したならば上からでも国民組織は出来ます。出来なければならぬ。日本の国の有難さはこゝに現れてゐるのであります。

- 満州事変を主導、軍部官僚による「国防政治」を主張。
- 土地を追われ、大地にさまよつたはずの大陸浪人は、国家とともに、もはや人間不在の、民衆の手の届かぬ高みにいる。追い詰められた者が最後に発見した、《空》……。

飛行機は無着陸でグルグル廻る。而も破壊兵器は最も新鋭なもの、例へば今日戦争になると次の朝、夜が明けてみ

ると敵国の首府や主要都市は徹底的に破壊せられて居る。その代り大阪も、東京も、北京も、上海も、廃墟になつて居りませう。凡べて吹き飛んでしまふ……。……此の惨状に堪へ得る者が最後の優者であります。

- 具体的な土地は必要がない。「世界最終戦争」は、空でおこなわれる。
- 重力は大陸浪人にはおよばない。戦争がはじまれば、敵味方双方の領土は一瞬で破壊される。上空であつて、大地の起伏など無意味。大地の破壊に^{ひる}怯んだほうが敗者。大地を克服した者こそ勝者。
- 大地とは富の源泉だが、いいかえれば、克服すべき欲望の象徴。大川の断食がはじまる。いかに大地が破壊されつくそうと、《場》としての皇道があれば、滅びることはない……。
- 《大地》を失って浮遊する大東亜共栄圏。